

妖怪年代記

泉鏡花作

一

予が寄宿生となりて松川私塾に入りたりしは、英語を學ばむためにあらず、數學を修めむためにあらず、なほ漢籍を學ばむにもあらず、他に密に期することのありけるなり。

加州金澤古寺町に兩鄰無き一宇の大廈は、松波某が、英、漢、數學の塾舎となれり。舊は旗野と謂へりし千石取の館にして、邸内に三件の不思議あり、血天井、不開室、庭の竹藪是なり。

事の原由を尋ぬるに、旗野の先住に、何某とかや謂ひし武士のありけるが、過まてることありて改易となり、邸を追はれて國境よりぞ放たれし。其室は當時家中に聞えし美人なりしが、女心の思詰めて一途に家を明渡すが口惜く、我は永世此處に留まりて、外へは出でじと、其居間に閉籠り、内より鎖を下せ

し後は、如何かしけむ、影も形も見えずなりき。

其後旗野は此家に住ひつ。先住の室が自ら其身を封じたる一室は、不開室と稱へて、開くことを許さず、はた覗くことをも禁じたりけり。

然るからに執念の留まれるゆゑにや、常には然せる怪無きも、後住なる旗野の家に吉事ある毎に、啾々たる婦人の泣聲、不開室の内に聞えて、不祥ある時は、さも心地好げに笑ひしとかや。

旗野に一人の妾あり。名を村といひて寵愛限無かりき。一年夏の半、驟雨後の月影冴かに照して、北向の庭なる竹藪に名残の雫、白玉のそよ吹く風に溢るゝ風情、またあるまじき觀なりければ、旗野は村に酌を取らして、夜更るを覺えざりき。

お村も少しくなる口なるに、其夜は心爽ぎ、興も亦深かりければ、飲過して太く酔ひぬ。人静まりて月の色の物凄くなりける頃、漸く盃を納めしが、臥戸に入るに先立ちて、お村は厠に上らむとて、腰元

に扶けられて廊下傳ひに彼不開室の前を過ぎけるが、
酔心地の瞻太く、ほと／＼と板戸を敲き、「この
執念深き奥方、何とて今宵に泣きたまはざる」と
打笑ひけるはほどこそあれ、生温き風一陣吹出で、
腰元の携へたる手燭を消したり。何物にか驚かされ
けむ、お村は一聲きやつと叫びて、右側なる部屋の
障子を外して僵れ入ると共に、氣を失ひてぞ伏した
りける。腰元は驚き恐れつゝ件の部屋を覗けば、内
には暗く行燈點りて、お村は脛も露に横はれる傍に、
一人の男ありて正體も無く眠れるは、蓋此家の用人
なるが、先刻酒席に一座して、酔過して寝ねたるな
れば、今お村が僵れ込みて、己が傍に氣を失ひ枕を
ならべて伏したりとも、心着かざる状になむ。此腰
元は春といひて、もとお村とは朋輩なりしに、お村
は寵を得てお部屋と成濟し、常に頤以て召使はるゝ
を口惜くてありけるにぞ、今斯く偶然に枕を並べた
る二人が態を見るより、惡心むら／＼と起り、介抱
もせず、呼びも活けで、故と燈火を微にし、「か
くては誰が眼にも」 と北叟笑みつゝ、忍
やかに立出で、主人の閨に走行きて、酔臥したるを
搖覺まし、「お村殿には御用人何某と人目を忍ば

れ候」^{たらいらひ} と欺^{あやむ}きければ、短慮^{たんりよ}無謀^{むぼう}の平素^{ひころ}を、酒^{さけ}に彌^{いや}
暴^{あら}く、怒氣^{どき}烈火^{れつくわ}の如^{ごと}く心頭^{しんとう}に發^{はつ}して、岸^が破^ばと蹶^{はねあ}起^おき、
枕^{まくら}刀^{がた}押^な取りて、一文字^{もんじ}に馳^{はせい}出^いで、障子^{しやうじ}を蹴^け放^{はな}して驀^{まつし}
地^{ぐら}に躍^{をどり}込^こめば、人畜^{にんちく}相^あ戯^{ひたはむ}れて形^{かた}の如^{ごと}き不^ふ體^{たい}裁^{さい}。前後^{ぜんご}
の分別^{ぶんべつ}に違^{いとまな}無く、用人^{ようじん}の素頭^{すかうべ}、拔手^{ぬくて}も見^みせず、ころ
りと落^{おち}しぬ。

旗野の主人は血刀提げ、「やをれ婦人、疾く覺めよ」とお村の肋を蹴返せしが、活の法にや合ひけむ、うむと一聲呼吸出で、あれと驚き起返る。

主人はハツタと睨附け、「畜生よ、男は一刀に斬棄てたれど、汝には未だ為むやうあり」と罵り狂ひ、呆れ惑ふお村の黒髪を把りて、廊下を引摺り縁側に連行きて、有無を謂はせず衣服を剥取り、腰に纏へる布ばかりを許して、手足を堅く縛めけり。

お村は夢の心地ながら、痛さ、苦しさ、恥しさに、涙に咽び、聲を震はせ、「こは殿にはものに狂はせ給ふか、何故ありての御折檻ぞ」と繰返しては聞ゆれども、此方は憤恚に逆上して、お村の言も耳にも入らず、無二無三に哮立ち、お春を召して酒を取寄せ、己が兩手に滴らしては、お村の腹に塗り、背に塗り、全身餘さず酒漬にして、其まゝ庭に突出だし、竹藪の中に投入れて、蟲責にこそしたりけれ。

深夜の出来事なりしかば、内の者ども皆眠りて知れるは絶えてあらざりき。「かまへて人に語るべからず。執成立せば面倒なり」と主人はお春を警めぬ。お村が苦痛はいかばかりなりけむ、「あら苦し、堪難や、あれよ／＼」と叫びたりしが、次第にもも得謂はずなりて、夜も明方に到りては、唯泣く聲の聞えしのみ、されば家内の誰彼は藪の中とは心着かで、彼の不開室の怪異とばかり想ひなし、且恐れ且怪みながら、元來泣聲ある時は、目出度きことの兆候なり、と言傳へたりければ、「いづれも吉兆に候ひなむ」と主人を祝せしぞ愚なりける。午前少しく前のほど、用人の死骸を發見したる者ありて、上を下へとかへせしが、主人は少しも騒ぐ色なく、「手討にしたり」とばかりにて、手續を経てこと果てぬ。お村は昨夜の夜半より、藪の眞中に打込まれ、身動きだにもならざるに、酒の香を慕ひて寄來る蚊の群は謂ふも更なり、何十年を経たりけむ、天日を蔽隠して晝猶闇き大藪なれば、濕地に生ずる蟲どもの、幾萬とも知れず群り出で、手足に取着き、這懸り、顔とも謂はず、胸とも謂はず、むず／＼と往來しつ、肌を嘗められ、血を吸はるゝ

苦痛は云ふべくもあらざれば、悶え苦み、泣き叫びて、死なれぬ業を歎きけるが、漸次に精盡き、根疲れて、氣の遠くなり行くにぞ、渠が最も忌嫌へる蛇の蜿蜒も知らざりしは、せめてもの僥倖なり、されば玉の緒の絶えしにあらねば、現に號泣する絲より細き婦人の聲は、終日休む間なかりしとぞ。

其日も暮れ、夜に入りて四邊の靜になるにつれ、お村が悲喚の聲冴えて眠り難きに、旗野の主人も堪兼ね、「あら煩惱し、いで息の根を止めむず」と藪の中に走入り、半死半生の婦人を引出だせば、總身赤く腫れたるに、紫斑々々の痕を印し、眼も中てられぬ惨状なり。

かくても未だ怒は解けず、お村の後手に縛りたる繩の端を承塵に潜らせ、天井より釣下げて、一太刀斬附くれば、お村は「ツと我に返りて、「殿、覺えておはせ、御身が命を取らむまで、妾は死なじ」と謂はせも果てず、はたと首を討落せば、骸は中心を失ひて、眞逆様になりけるにぞ、踵を天井に着けたりしが、血汐は先刻脛を傳ひて足の裏を染めた

れば、其が天井に着くとゝもに、怨恨の血判二つを
ぞ捺したりける。此一念の遺物拭ふに消えず、今に
傳へて血天井と謂ふ。

人を殺すにも法こそあれ、旗野がお村を屠りし如
きは、實に惨中の惨なるものなり。家に仕ふる者ど
も、其物音に駈附けしも、主人が血相に恐をなして、
留めむとする者無く、遠巻にして打騒ぎしのみ。殺
盡せしお村の死骸は、竹藪の中に埋棄てゝ、跡弔も
せざりけり。

はじめお村を讒し、お春は、素知らぬ顔にもてなしつゝ此家に勤め續けたり。人には奇癖のあるものにて、此婦人太く蜘蛛を恐れ、蜘蛛といふ名を聞きただに、絶叫するほどなりければ、況して其物を見る時は、顔の色さへ蒼ざめて死せるが如くなりしとかや。

お村が虐殺に遭ひしより、七々日にあたる夜半なりき。お春は厠に起出でつ、歸には寢惚けたる眼の戸惑ひして、彼血天井の部屋へ入りにき。それと遽に心着けば、天窓より爪先まで氷を浴ぶる心地して、歯の根も合はず戦きつゝ、不氣味に堪へぬ顔を擡げて、手燭の影幽に血の足痕を仰見る時しも、天井より絲を引きて一疋の蜘蛛垂下り、お春の頬に取着くにぞ、あと叫びて立竦める、咽喉を傳ひ胸に入り、腹より背に這廻れば、聲をも得立てず身を悶え虚空を掴みて苦みしが、はたと僵れて前後を失ひけり。夜更の事とて誰も知らず、朝になりて見着けたる、

お春の身體は冷たかりき、蜘蛛の這へりし跡やらむ、
繩にて縊りし如く青き條をぞ畫きし。

眼前お春が最期を見てしより、旗野の神經狂出し、
あらぬことのみ口走りて、一月餘も惱みけるが、一
夜月の明かなりしに、外方に何やらむ姿ありて、旗
野をおびき出すが如く、主人は居室を迷出で、漫
ろに庭を徘徊ひしが、恐しき聲、を發して、おのれ！
といひさま刀を抜き、竹藪に躍蒐りて、えいと殺
ぎたる竹の切口、斜に尖れる切先に轉べる胸を貫き
て、其場に命を落せしとぞ。佛家の因果は是ならむ
かし。

旗野の主人果て、後、代を襲ぐ子とても無かりけ
れば、やがて其家は斷絶にけり。

數歳の星霜を経て、今松波の塾となれるまで、種々
人の住替りしが、一月居しは皆無にて、多きも半月
を過ぐるは無し。甚だしきに到りては、一夜を超え
て引越せしもあり。松川彼處に住ひてより、別に變
りしこともなく、二月餘も落着けるは、いと珍しき

ことなりと、近鄰の人は噂せり。さりながらはじめの内は十幾人の塾生ありて、教場太く賑ひしも、二人三人と去りて、果は一人もあらずなりて、後にはたゞ晝の間通學生の來るのみにて、塾生は我一人なりき。

前段既に説けるが如く、予が此塾に入りたりしは、學問すべきためにはあらで、いかなる不思議のあらむかを窺見むと思ひしなり。我には許せ、性として奇怪なる事とし謂へば、見たさ、聞きたさに堪へざれども、固より頼む腕力ありて、妖怪を退治せむとはあらず、胸に蓄ふる學識ありて、怪異を研究せむにもあらず。俗に恐いもの見たさといふ好事情のみなり。

さて松川に入塾して、直ちに不開室を探検せんとせしが、不開室は密閉したるが上に板戸を釘付にしたれば開くこと無し。僅に板戸の隙間より内の模様を窺ふに、疊二三十も敷かるべく、柱は參差と立ならべり。日中なれども暗澹として日の光幽に、陰々たる中に異形なる雨漏の壁に染みたるが仄見えて、

鬼氣人に逼るの感あり。即ち隙見したる眼の無事なるを取柄にして、何等の發見せし事なく、踵を返して血天井を見る。こゝも用無き部屋なれば、掃除せしこともあらずと見えて、塵埃床を埋め、鼠の糞梁に堆く、障子襖も煤果てたり。そこぞと思ふ天井も、一面に黒み渡りて、年経る血の痕の何處か辨じがたし、更科の月四角でもなかりけり、名所多くは失望の種となる。されどなほ餘すところの竹藪あり、蓋し土地の人は八幡に比し、恐れて奥を探る者無く、見るから物凄き白日闇の別天地、お村の死骸も其處に埋めつと聞くほどに、うかとは足を入難し、予は先づ支度に取懸れり。

誰にか棄てられけむ、一頭流浪の犬の、予が入塾の初より、數々庭前に入來り、そこはかと餌をニるあり。予は少しく思ふよしあれば、其頭を撫で、背を摩りなどして馴近け、賄の幾分を割きて與ふること兩三日、早くも我に臣事して、犬は命令を聞くべくなれり。

四

水曜日すいようびは諸學校しよがくかうに授業じゆげふあるに關かゝらず、私塾しじゆく大抵たいていは
 休暇きうかなり。予よは閑かんに乗じようじ、庭にはに出いで、彼かの竹藪たけやぶに赴おもむ
 けり。然しかるに豫かねてより斥候せつこうの用ように充あてむため馴ならし置お
 きたる犬いぬの此時このとき折をりよく來きたりたれば、彼かれを眞先まっさきに立た
 しめて予よは大瞻だいたんにも藪やぶに入いれり。行ゆくこと未いまだ幾干いくばく
 ならず、予よに先さきむじて駈かけ込みたる犬いぬは奥深おくふかく進すすみて
 見みえずなりしが、**■**呀何事あなやなにことの起おこりしぞ、乳虎にうこ一聲高せいたか
 く吠ほえて藪中さつちゆう俄にはかに物騒ものさわがし、其響そのひびきに動搖どうえうせる滿藪まんさうの
 竹葉相觸ちくえふあひふれてざわ／＼／＼と音おとしたり。予よはひやり
 として立停たちどまりぬ。稍やゝありて犬いぬは奥おくより駈かけ來きたり、予よ
 が立たてる前まへを閃過せんくわして藪やぶの外おもてへ飛出とびいだせり。其劍幕そのけんまく
 に驚おどろきまどひて予よも慌あわたゞしく逃出にげいだし、只見とみれば
 犬いぬは何なにやらむくち口に銜くはへて躍をどり狂くるふ、こは怪あやし口くちに銜くは
 へたるは一尾いちびの魚うをなり、そも何なんぞと見みむと欲ほつして近ちか
 寄よれば、獵物えものを奪うばふとや思おもひけむ、犬いぬは逸散いつさんに逃去にげさ
 りぬ。予よは茫然ぼうぜんとして立たちたりけるが、想おもふに藪やぶの
 中なかに住居すまへるは、狐きつねか狸たぬきか其類そのるゐならむ。渠奴犬かやついぬの為ため
 に劫あひやかされ、近隣きんりんより盜來ぬすみきたれる午飯おひるを奪うばはれしに極きは
 まりたり、然さらば何なにほどのことやある、と爰こゝに勇氣ゆうき

を回復して再び藪に侵入せり。

疊翠滋蔓繁茂せる、竹と竹との隙間を行くは、篠
突く雨の間を潜りて濡れまじとするの難きに肖たり。
進退頗る困難なるに、拂ふ物無き蜘蛛の巣は、前途
を羅して煙の如し。蛇も閃きぬ、蜥蜴も見えぬ、其
他の濕蟲群をなして、縦横交馳し奔走せる状、一眼
見るだに胸悪きに、手足を縛され衣服を剥がれ若き
婦人の肥肉を酒鹽に味付けられて、蟲の膳部に佳肴
となりしお村が當時を憶遣りて、予は思はずも慄然
たり。

こゝはや藪の中央ならむと舊來し方を振返れば、
眞晝は藪に寸斷されて點々星に髣髴たり。なほ何程
の奥やあると、及び腰に前途を視む。時其時、玄々
不可思議奇絶怪絶、紅きものちらりと見えて、背向
の婦人一人、我を去る十歩の内に、立ちしは夢か、
幻か、我はた現心になりて思はず一步引退れる、と
たんに此方を振返りし、眼口鼻眉如何で見分けむ、
唯、丸顔の眞白き輪郭ぬつと出でしと覺えしまで、
予が絶叫せる聲は聞えて婦人が言は耳に入りぬ、

「こや人に説ふ勿れ、妾が此處にあることを」一
種異様の語氣音調、耳朶にぶんと響き、腦にぐわら
／＼と浸み渡れば、眼眩み、心消え、氣も空になり
足漾ひ、魂ふら／＼と拔出で、藻脱となりし五尺の
殻の縁側まで逃げたるは、一秒を経ざる瞬間なりき。
腋下に颯と冷汗流れて、襦袢の背はしと濡れたり。
馳せて書齋に引籠り机に身をば投懸けてほつと吐く
息太く長く、多時觀念の眼を閉ぢしが、「さても
見まじきものを見たり」と聲を發して呟きける。

「忍ぶれど色に出でにけり我戀は」と謂ひしは
粹なる物思ひ、予はまた野暮なる物思に臆病の色類
に出で、蒼くなりつゝ結ばれ返るを、物や思ふと松
川はじめ通學生等に問はるゝ度に、口の端むず／＼
するまで言出だしたさに堪ざれども、怪しき婦人が
予を戒め、人に勿謂ひそと謂へりしが耳許に残り居
りて、語出でむと欲する都度、おのれ忘れしか、秘
密を漏らさば、活けては置かじと囁く様にて、心濟
まねば謂ひも出でず、もしそれ胸中の疑を吐きて
智識の教を請けむには、胸襟乃ち春開けて臆病疾に
癒えむと思へど、無形の猿轡を食まされて腹のふく
るゝ苦しさを、斯くて幽玄の裡に數日を読せり。

一夕、松川の誕辰なりとて奥座敷に予を招き、杯盤を排し酒肴を薦む、獻酬數回予は酒といふ大膽者に、幾分の力を得て積日の屈託稍散じぬ。談話の次に松川が塾の荒涼たるを歎ちしより、予は前日藪を檢せし一切を物語らむと、「實は」と僅に言懸けゝる、正に其時、啾々たる女の泣聲、針の穴をも通らむず絲より細く聞えにき。予は其を聞くと整しく口をつぐみて悄氣返れば、春雨恰も窓外に嘯き至る、瀟々の音に和し、長吁短歎絶えてまた續く、婦人の泣音怪むに堪へたり。

五

「あれは何が泣くのでせう」と松川に問へば
 苦い顔して、談話を傍へそらしたるにぞ推しては問
 はで黙して休めり。ために折角の酔は醒めたれども、
 酔うて席に堪へずといひなし、予は寢室に退きつ。
 思へば好事には泣くとぞ謂ふなる密閉室の一件が、
 今宵誕辰の祝宴に悠々勸を盡すを嫉み、不快なる聲
 を發して其快樂を亂せるならむか、あはれ忌むべし
 と夜着を被りぬ。眼は眠れども神は覺めたり。

寢られぬまゝに夜は更けぬ。時計一點を聞きて後、
 漸く少しく眠氣ざし、精神朦々として我々を辨ぜず、
 所謂無現の境にあり。時に予が寝ねたる室の襖の、
 スツとばかりに開く音せり。否唯音のしたりと思へ
 るのみ、別に誰そやと問ひもせず、はた起直りて見
 むともせず、うつら／＼となし居れり。然るにまた
 疊を摺來る跫音聞えて、物あり、予が枕頭に近寄る
 氣勢す、はてなと思ふ内に引返せり。少時してま
 た來る、再び引返せり、三たびせり。

此に於て予は猛然と心覺めて、寢返りしつゝ眼を
ニき、不圖一見して蒼くなりぬ。予は殆ど絶せむと
せり、そも何者の見えしとするぞ、雪もて築ける裸
體の婦人、あるが如く無きが如き燈の蔭に朦朧と乳
房のあたりほの見えて描ける如くイめり。

予は叫ばむとするに聲出でず、蹶起きて逃げむと
急るに、磐石一座夜着を壓して、身動きさへも得な
らねば、我あることを氣取らるまじと、愚や一縷の
鼻息だもせず、心中に佛の御名を唱へながら、戦く
手足は夜着を煽りて、波の如くに揺らめいたり。

婦人は予を凝視むるやらむ、一種の電氣を身體に
感じて一際毛穴の彌立てる時、彼は得もいはれぬ聲
を以て「藪にて見しは此人なり、テモ暖かに寝た
る事よ」と呟けるが、まざ／＼と聞ゆるにぞ、氣
も魂も身に添はで、予は一竦に縮みたり。

斯くて婦人が無體にも予が寝し衾をかゝげつゝ、
衝と身を入るゝに絶叫して、護謨球の如く飛上り、
室の外に轉出でゝ畢生の力を籠め、艶魔を封ずるか

の如く、襖を壓へて立ちけるまでは、自分なせし業とは思はず、祈念を凝せる神佛がしかなさしめしを信ずるなり。

寒さは寒し恐しさにがた／＼震少しも止まず、遂に東雲まで立竦みつ、四邊のしらむに心を安むじ、壓へたる戸を引開くれば、臥戸には藻脱の殻のみ残りて我も婦人も見えざりけり。其夜の感情、よく筆に寫すを得ず、いかむとなれば予は餘りの恐しさに前後忘却したればなり。

然らでも前日の竹藪以来、怖氣の附きたる我なるに、昨夜の怪異に膽を消し、もはや斯塾に堪らずなりね。其日の中に逃歸らむかと已に心を決せしが、さりとは餘り本意無し、今夜一夜辛抱して、もし再び昨夜の如く婦人の來ることもあらば度胸を据え、て其の容貌と其姿態とを觀察せむ、あはよくば勇を震ひて言葉を交し試むべきなり。よしや執着の留りて怨を後世に訴ふるとも、罪なき我を何かせむ、手にも立たざる幻影にさまで恐るゝことはあらず、と白晝は何人も爾く英雄になるぞかし。逢魔が時の薄

暗がりより漸次に元氣衰へつ、夜に入りて雨の降り
出づるに薄ら淋しくなり増りぬ。漫に昨夜を憶起し
て、轉た恐怖の念に堪へず、斯くと知らば日の中に
辭して斯塾を去るべかりし、よしなき好奇心に驅ら
れし身は臆病神の犠牲となれり。

只管洋燈を明くする、これせめてもの附元氣、机
の前に端坐して石の如くに身を固め、心細くも唯一
人更け行く鐘を數へつゝ、「早一時か」と呟く時、
陰々として響き來る、怨むが如き婦人の泣聲、柱を
回り襖を潜り、壁に浸入る如くなり。

南無三膝を立直し、立ちもやらず坐りも果てず、
魂宙に浮く處に、沈んで聞ゆる婦人の聲、「山
田々々」と我が名を呼ぶ、「呀と頭を掉傾け、聞
けば聞くほど判然と疑も無き我が名の山田「山
田々々」と呼立つるが、囁く如く近くなり、叫ぶ
が如くまた遠くなる、南無阿彌陀佛コ八堪らじ。

六

今はハヤ須臾の間も忍び難し、臆病者と笑はゞ笑へ、恥も外聞も要らばこそ、予は慌しく書齋を出で、奥座敷の方に駈行きぬ。蓋し松川の臥戸に身を投じて、味方を得ばやと欲ひしなり。

既にして、松川が閨に到れば、こはそもいかに彼の泣聲は正に此室の裡よりす、予は入るにも入られず愕然として襖の外に戦きながら突立てり。

然るに松川は未だ眠らでぞある。鬱し怒れる音調以て、「愛想の盡きた獣だな、汝、苟くも諸生を教へる松川の妹でありながら、十二にもなつて何の事だ、何うしたらまたそんなに學校が嫌なのだ。これまで幾度と數知れず根競と思つて意見をしても少しも料簡が直らない、道で遊んで居ては人眼に立つと思ふかして途方も無い學校へ行くてつちやあ家を出て、此頃は庭の竹藪に隠れて居る。此間見着けた時には、腹は立たないで涙が出たぞ」と切齒をなして憤る。

傍より老いたる婦人の聲として「これお長、母様のいふ事も兄様のおつしやる事もお前は合鮎が行かないかい、狂氣の様な娘を持った私や何といふ因果であらうね。其癖、犬に吠えられた時、お辨當のお菜を遣つて口塞をした氣轉なんぞ、満更の馬鹿でも無いに」と愚癡を零すは母親ならむ。

松川は腹立たしげに「其が馬鹿智慧と謂ふもんだ、馬鹿に小才のあるのはまるつきりの馬鹿よりなほ不可い。彼の時藪の中から引摺出して押入の中へ入れて置くと、死ぬ様な聲を出して泣くもんだから

——何時だつけ、むゝ俺が誕生の晩だ——

山田に何が泣いてるのだと問はれて冷汗を掻いたぞ。貴様が法外な白癡だから己に妹があると謂ふことは人に秘して居る位、山田の知らないのも道理だが、これ／＼で意見をすると恥かしくつて言はれもしない。それでも親の慈悲や兄の情で何うかして學校へも行く様に眞人間にして遣りたいと思へばこそ性懲を附けよう為に、昨夜だつて左様だ、一晚裸にして夜着も被せずに打棄つて置いたのだ。すると何うだ、己にお謝罪をすれば未しも可愛氣があるけれど、

いくら寒さむいたつて餘あまりな、山田やまだの寢床ねどこへ潜もぐりこみに行いきをつた。彼あれが妖怪ばけものと思違おもひちがひひをして居ゐるのも否いやとは謂いはれぬ。妖怪ばけものより餘程よつほど怖い馬鹿ばかだもの、今夜こんやはもう意見いけんをするんぢやあないから謝罪わびたつて承知しやうちはしない、撲殺なぐりころすのだから左様さう思おもへ」と咎しもとの音おとひうと鳴なりて肉にくを鞭むちうつ響ひびせり。女をんなはひい／＼と泣なきながら、「姉様ねえさん謝罪あわびをして頂戴ちやうだいよう、あいたゝ、姉様ねえさんよう」と、哀あはれなる聲こゑにて助たすけを呼よぶ。

今いま姉さんと呼よばれしは松川まつかはの細君さいくんなり。「これまで幾度いくたび謝罪あわびをして進あげましても、お前様まへさんの料簡れうけんが直なほらないから、もう／＼何なんと謂いつたつて御肯入おきゝれなさらぬ、妾わたしが謂いつたつて所詮しよせん駄目だめです、あゝ、餘あんなり酷ひどうございますよ。少すこし御手柔おてやはらかに遊あそばせ、あれ／＼それぢやあ眞個ほんたうに死しんでしまひますわね、母様おつかさん、もし旦那だんなつてば、御二人おふたりで御折檻ごせつかんなさるから仕様しやうが無い、えゝ何どうせうね、一寸ちよつと來きて下ください」と聲震こゑふるはし「山田やまださん、山田やまださん」我われを呼よびしは、さては是これか。

【完】